

人が集まるまち台東

「伝統と新しさの共存でにぎわいあるまちづくり」

平成24年5月に東京スカイツリー®が開業したことで、以前にも増して観光客でにぎわう台東区。区では浅草文化観光センターをリニューアルオープンし、区の観光拠点として増加する国内外からの観光客に対応しています。さらに、区が誇る数々の文化施設や、ものづくりのまちとしての特徴を観光に生かし、さらなるにぎわいづくりに結びつけようとしています。



昨年リニューアルオープンした浅草文化観光センター。外観は木格子を使用した日本の伝統建築を意識したデザインで、2012年度グッドデザイン賞を受賞した。

人が集まり
にぎわうまち

台東区には史跡や芸術・芸能などの豊富な文化資源や、風情ある街並み、四季折々の行事など、たくさん魅力があります。こうした特徴を生かすため、区では平成13年に23区で初めて「観光ビジョン」を策定し、観光に関する取組を行ってきました。

その後、平成24年に東京スカイツリーが開設されることになり、また、国による観光立国への取組における訪日外国人旅行者数の増加など、区を取り巻く環境は大きく変化しました。こうした変化に対応していくため、平成22年には「新観光ビジョン」を策定しました。

さらに、製造業や卸・小売業でにぎわってきたという区の特徴を生かしていくため平成24年に「産業振興プラン」を策定しました。区内に多い中小・零細企業は社会経済の変化による影響を受けやすいという現状があります。そうした状況を踏まえ、区の産業が抱える課題を明確にし、的確に対応することで産業の振興を図ろうとしています。

「台東区観光統計・マーケティング調

伝統と江戸情緒あふれるさまざまな行事



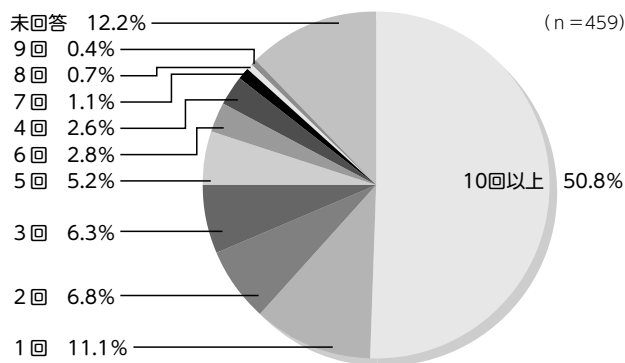
「査」によると、平成22年度の調査では、区への年間の観光客数は4000万人で、昨年の調査結果では、東京スカイツリー開業記念事業を区内各地域で開催した効果もあり、さらに増えて4400万人にのぼっています。京都市を

台東区への来訪経験

Q 今回が何回目の来訪か

※平成21年8～9月実施の来訪者調査による（台東区新観光ビジョンより）

区を訪れる観光客はリピーターが約77%、10回以上来訪経験のある人が過半数に及ぶ



訪れる観光客は年間約5000万人であり、台東区は23区で最も面積が小さな区でありながら、世界に名だたる観光都市に並ぶ集客力のある地域だといえます。外国人観光客が多く訪れる浅草、文

台東区観光の拠点として

化施設が集まる上野など区内にはさまざまな観光スポットが点在しますが、年間を通して行われる数々の行事も魅力のひとつとなっています。昨年は、浅草寺の初詣に3日間で275万人、うえの桜まつりへは200万人、5月に行われた三社祭には184万人、そして西の市へは105万人もの観光客があり、1年を通して多くの人でにぎわう地域であるということがわかります。

昨年5月に隣接する墨田区に東京スカイツリーが開業しましたが、台東区ではそれに先駆け4月に、浅草文化観光センターをリニューアルオープンしました。地下1階地上8階建てにリニューアルされた同センターは、観光案内所としてのスペースは1階・2階合わせて約475平方メートル、その他展示スペースや会議室等も含め、延床面積は2159・52平方メートルと全国的にも最大級の規模を誇っています。国内外から訪れる観光客のニーズに応えるため、外貨両替所を設置すると同時に、観劇・美術館等のチケット販売のほか、2階には無料情報端末や観光情報雑誌の整備、公衆無線LANを

完備するなど旅行時に便利な機能が集積しています。また、3階には旅行団体支援スペースを設置し、修学旅行等の引率の先生や団体旅行のガイドの方の待機場所として提供しています。その他、多目的スペースや展示スペースも設置し、区内の観光・産業関係団体等によるイベントや展示などに利用されています。

昨年10月には、日本政府観光局（JNTO）が訪日外国人旅行者の受け入れ環境整備の一環として実施している外国人観光案内所の認定制度において、最高ランクであるカテゴリー3を取得しました。このカテゴリー3に認定されているのは、全部で342ある認定施設（平成25年1月現在）のうち、成田国際空港の外国人案内所や都庁の東京都観光情報センターなど全国で7か所しかありません。今年の2月には、JNTO主催の平成24年度「ビジット・ジャパン」研修会において、全国から観光案内所のスタッフ約140名が視察に訪れました。この浅草文化観光センターは、連日浅草観光の拠点として、個人・団体旅行を問わず浅草を訪れる国内外からの観光客に利用されており、今年5月には来館者が100万人を超え、記念式

浅草周辺・東京スカイツリーへの観光拠点としてにぎわう 浅草文化観光センター

- ◆ 1日あたりの平均利用者数 平日2,000人、土・日・祝日4,000人
- ◆ 日本人観光客と外国人観光客の割合 日本人観光客に対して外国人観光客が約10%



国内外から来訪する観光客のニーズに応えるため、1階案内カウンターでは日・英・中・韓の4か国語で観光案内を提供している



浅草寺雷門前に位置しているので、最上階の展望テラスから浅草のまちや東京スカイツリーが一望できるのも人気

来館100万人目となった浅草を訪れた台湾の家族に、今年5月の来館者100万人を記念する式典で区長、区議会議長から記念品が贈られた



文化施設が協力し地域の魅力を発信

典が行われました。

国内有数の文化施設が集まる上野地域も国内外からの観光客が多い人気エリアです。平成21年8月から9月にかけて実施された来訪者調査（「台東区新観光ビジョン」）によると、台東区を訪れる目的で最も多いのが「まちあ

るぎ・散歩」で、「博物館・美術鑑賞」がそれに続きます。

上野公園とその周辺には、数多くの文化施設が存在し、またその種類も博物館・美術館・音楽ホールや学術施設など、多岐にわたっています。

平成2年には、上野の山を芸術・文化の拠点として発展させることを目的に、この地域に立地する各施設・団体

と台東区が一体となり、「上野の山文化ゾーン連絡協議会」が設立されました。この協議会は、この地域に立地する国公立の文化・学術施設にとど

まらず、周辺の民間文化施設、観光連盟、鉄道会社など、現在は25団体が加盟し、区が事務局を担当しています。運営母体の違いを超えた長年の活動が認められ、平成17年には「地域づくり総務大臣表彰（地域振興部門）」を受賞しています。

それまでは、同じ上野の山にあっても施設間の連携はあまりありませんでした。しかし、協議会

が設立されたことをきっかけとして、加盟施設・団体の相互交流がスムーズとなり、上野の山の魅力を内外に向けて広く効果的に発信できるようになりました。加盟施設の展覧会や、コンサート情報をまとめたパンフレットを春と秋に発行しており、台東区民はもとより来訪する観光客からも大変好評です。上野の山にある文化施設を、児童

●上野の山文化ゾーン連絡協議会加盟施設

東京国立博物館
国立科学博物館
国立西洋美術館
東京藝術大学
国立国会図書館国際子ども図書館
東京文化財研究所
国立教育政策研究所社会教育実践研究センター
日本学士院
日本藝術院
東京都美術館
東京都恩賜上野動物園
東京文化会館
東京都東部公園緑地事務所
(公財)文化財保護・芸術研究助成財団
上野の森美術館
寛永寺
上野観光連盟
(株)大丸松坂屋百貨店 松坂屋上野店
東日本旅客鉄道(株)
京成電鉄(株)
東京地下鉄(株)
(公財)東京都公園協会
学校法人上野学園
(公財)台東区芸術文化財団
台東区



今年も展覧会やコンサート、講演会などのイベントが盛りだくさん「上野の山文化ゾーンフェスティバル」を開催

にもわかりやすく紹介したパンフレットや、外国人観光客向けの英語版パンフレットも作成しており、学校や近隣の宿泊施設からの問い合わせもあります。特に毎年9月から11月にかけて行われる「上野の山文化ゾーンフェスティバル」は、各施設で開催される話題の展覧会やコンサートのほか、上野の山ならではの幅広い分野の講師陣による



平成16年の開始から「台東デザイナーズビレッジ」にはこれまで73社が入居した。区では、スペースを貸し出す以外にも、企業者としての自立を支援するために、定期的にセミナーを開催するなどさまざまな支援事業を実施している

講演会シリーズ、寛永寺特別公開など、芸術と文化に関する多彩なイベントを開催しており、遠方からの申込みもあるとのこと。

「上野の山文化ゾーン連絡協議会」発足の2年後、平成4年から始まったフェスティバルは、昨年20周年を迎えた。平成24年はこれを記念して、10月20日に、各施設で21時までの夜間延長開館や事前申込制のイベントを開催しました。これだけの規模で上野の山の施設が一斉に夜間延長開館などを実施するのは初めての試みであり、これまでの相互交流や連携があったからこそ実現できたものでした。

こうしたイベントを国、都、区、民間の団体が一体となって一斉に実施することで、上野の山全体が内外に広く発信され、来訪する観光客にとっても

大きな魅力となっています。

「ものづくり」で新たなにぎわいを

台東区は、江戸時代より商工業の中心地のひとつとして、手工業や製造業、それらの生産の流通を担う問屋・卸売業の集積地として発展してきました。そのような中、御徒町から蔵前にかけての区南部地域はいま、「徒蔵（かちくら）」と呼ばれ、若手クリエイターたちが集まる人気スポットとして注目を浴びています。

区は、平成16年、地場産業であるファッション関連産業の活性化を図るため、若手デザイナーの創業支援として廃校となった旧小島小学校跡地に「台東デザイナーズビレッジ」（通称…デザビレ）を開設しました。低廉な家賃で事務所やアトリエを貸し出し、若手デザイナーの起業を応援しています。入居期間は原則3年で、卒業までの間に生産体制や販路開拓など企業としての基盤を固めてもらいます。

入居者の多くが卒業後も区内に留まり活躍するにつれ、次第にデザビレ周辺が新進気鋭のクリエイターが集まるまちとして注目を浴びるようになりました。このような若手クリエイターたちが区が誇る地場産業の職人たちとコ

ラボレートすることで産業振興につながり、近年、そうした「ものづくりのまち」としてにぎわいが生まれることで、観光客誘致にもつながっています。平成23年からは、メーカーを中心とする地元企業の有志によるイベント「モノマチ」が自主的に開催されています。デザイナー自身が接客をしたり、仕事場の様子を公開する以外にも、職人による実演、ワークショップ、期間

限定商品の販売等を実施しており、来場者はまちを回遊しながらものづくりの魅力を発見、体験できます。毎回、好評を博しており、4回目となる今回はモノマチ全体で延べ11万人の人が訪れ、まちに活気があふれました。このように「ものづくりのまち」ならではの取組が観光客への新たな魅力となっており、まちの活性化に結びついています。

“まち”と“ものづくり”の魅力に触れる3日間

モノマチ

● 出店者の感想
「地域のお祭りのような盛り上がりがあり、街行く人たちの楽しんでいる雰囲気など、この街のパワーを感じた」「普段はお見えにならない客層であったり、ジャンルの方であったり、小さなお客様まで来てくださった」「地域の一体感がよかった」「この街のほのぼのとした雰囲気の中に職人の街、問屋の街の活気をとても力強く感じた」

イベントではデザイナーと直接会話を交わしたり、ものづくり体験ができる

● 来場者の感想
「デザイナーさんたちに触れる機会がないので貴重な体験だった。モノへの愛着がわく」「昨年、初めて来て、ハマった」「非常に勉強になった。特に革製品の多さと質の良さには、日本のモノづくりの底力を見る事ができた」

「モノマチ」には台東デザイナーズビレッジも施設公開という形で参加し、当日は普段入ることのできないアトリエの見学や入居者の商品販売などを行っている